のイエスとの邂逅であった。ワイルドは，自分の資質にふさわしい出会いをしたわけである。

ワイルドの生涯と著作における書簡の位相

西　村　孝　次
（協会顧問・元明治大学教授）

イギリス人は気違いじみるくらい手紙好きである。イギリスの作家は近代から現代にいたるまで実におびただしい量の書簡を書き残している。

ひとつの例を挙げれば，ジョン・キーツ（1795—1821）であって，弟のジョージとトム，妹のファニーをはじめ，恋人のファーニー・ブローン(39通)，友人のシェリー，リー・ハント，画家のベンジャミン・ヘイドンやジョウゼフ・セヴァーンその他に宛てて多くの手紙を書き送った。それらは，フォーマン兄弟の『ハムプステッド版』(1938)によって集成され，さらにロリンズにより補完された(1958)。キーツの手紙について，T. S. エリオット（1888—1965）は「かつていかなるイギリスの詩人の書いた手紙のなかでもっとも注目すべき，またもっとも重要なもの」とさえ激賞した。

そのエリオット自身が，今世紀における「もっとも注目すべき，またもっとも重要な」手紙の書き手として，D. H. ロレンス（1885—1930）と双璧になろうとしているのであるが，ワイルドの『獄中記』は，こうしたイギリス書簡文学の系譜のなかで捉えられてこそ，初めてその真価を認められるのである。

すくなくともこの手記がロバート・ロス（1869—1918）の善意による削除版としてとどまる限り，それは一種の信仰告白として読まれたのみでなく，またそういうものとして喜ばれてもいた。ところが1962年，ひとりの出版者・伝記作者ルーパート・ハート・ディヴィスがこれの完本を編集・刊行するに及んで，これがほかならぬアルフレッド・ダグラス卿(1870—1947)への奇妙な異常な長文の私信であることが判明し確認されたのだった。したがって，わたしたちは，今日，これを言語に絶する快楽と呪詛と悔恨と希望の錯綜する書簡文学のひとつとして読むようになったわけである。しかもこれは，さきのキーツの手紙が，ある意味でかれの自身の詩とその時代の貴重な註釈であったように，『獄中記』はワイルド自身の作品と19世紀という特定の時代と社会についての独特の評釈となっている。

もし，かりにワイルドの一生を創作と批評と手紙との時代という三期に分けるとすれば，出獄してからのワイルドは，C. C. 3. という囚人番号によってしか発表できなかった『レディング牢獄の唄』を唯一の例外として，ただ手紙を書きつづけたままで，パリの安宿で窮死するほかなかった。それは，いわば，『獄中記』のあとをうけての悲惨な，だがリアルなアンティ・クライマックスだったのである。

Wilde 劇の女たち

河　内　恵　子
（慶応義塾大学助教授）

Wildeはさまざまな個性を創造した。男，女，子供，動物，植物といった個性は，さまざまな文学ジャンルにおいて Wilde の内的世界を語り続けている。これらの個性の中から女を，そして，文学ジャンルからは演劇を選んで，両者の関わり合いを見つめ，ひいては，劇作家 Wilde の技の一端を考えてみたい。

演劇以外の文学ジャンルにおいて，女たちの言葉はきわめて少ない。また，彼女たちが担う役割も，男たちのそれと比較すれば，重要度の低いものである。しかし，戯曲においてはどうだろう。事情は一変する。饒舌な女たちが演劇空間を独占しているのだ。

初期の作品である *Vera, or the Nihilists* の主人公 Vera は革命の必要性を熱情を込めて語りもすれば，恋人 Alexis への思いの丈を率直に伝えもする。同じく初期の悲劇である *The Duchess of Padua* の主人公 Beatrice も言葉を尽くして自らの思いを表明する。貧しい者たちへの共感の情を素直に表現する言葉も持っていれば，恋人 Guido Ferranti に対する激しい思いを伝える術も持ち合わせている。詩劇 *Salomé* は，これら二作品よりずっと後に書かれた作品ではあるが，主人公 Salomé も Vera や Beatrice に負けず劣らず，よく喋る。命令，哀願，拒絶——ありとあらゆる言語操作の術を余す所無く披露してくれる女である。

しかし，Vera も Beatrice も，そしてまた Salomé も，自らの思いを言葉を尽くして語ってはいても，自分以外の他の女と言葉を交わすことをほとんどしない。内なる思いを独白したり，男への愛を告白したり，演説口調で己の死生観を表明することはあっても，同性の友との，あるいは同性の敵との対話を経験することはない。

Vera や *The Duchess of Padua* を執筆していた頃の若き Wilde には一作品において複数の女を描き出す技が備わっていなかったのかもしれない。また，一幕劇という限られた条件の下では，Salomé という一人の女の個性に重点をおいて創作せざるをえなかったのかもしれない。唯一人の女に焦点を当てて書きたいという願いが Wilde の心の内に